

後桜町女帝年譜稿

所 京 子

〔解説〕わが国には、歴史上八人の女帝（うち二人は重祚である）がおられた。古代の六帝については、かなり研究が進められてきたが、近世江戸時代の二人、とりわけ最後の女帝とされた後桜町天皇に関しては、その龐大な宸記（四十一巻）および一六〇〇余首にもほのぼの御製の和歌があるにもかかわらず、かならずしもその事績は明らかにされていない。

そこで私は、今後この後桜町天皇の御製和歌を通して、宸記の解説も試みつつ、天皇のご生涯を明らかにしていきたいと考えている。そのため、いわばその基礎作業として、女帝の年譜を作成する。特に『統史愚抄』（増訂国史大系15）の記述の中から主に和歌関係の記事をとり出し、これに『宸翰英華』（第二冊）と『列聖全集』『御製集』第十一巻「後桜町天皇御製」（『皇室文学大系』第三輯所収）を加えてみていく。

近世の堂上歌壇に関する研究は、『近世堂上和歌論集』（明治書院刊、一九八九）および鈴木健一氏著『近世堂上歌壇の研究』（汲古書院刊、一九九一）などがある。しかし、いずれも江戸前期の後陽成院・後水尾院・靈元院を中心に述べられており、それに比べて江戸後

期の桜町院・後桃園院そして後桜町院については、ほとんど言及されていない。

そこで本稿は、まず「後桜町女帝年譜稿」として、その誕生から後桃園天皇へのご譲位までを扱う。年譜事項のうち、説明を要することは補注に略記する。

なお、主な典拠とした『統史愚抄』の編者柳原紀光（延享三―寛政十二―一七四六―一八〇〇）について簡単にふれておきたい。

柳原紀光（もと光房）は、紀伝道を以て立つ柳原家に生まれた。父は権大納言光綱、母は近江守織田信休の女郁子である。明和五年（一七六八）従四位上藏人頭、以後累進して、同八年（一七七二）参議、安永四年（一七七五）正三位権大納言に昇り、天明元年（一七八一）正二位となる。その間、桃園・後桜町・後桃園・光格天皇の四朝に仕え、頗る順調な昇進を遂げたが、それは「彼のすぐれた才能と公事精励の結果」であると共に「関白近衛内前の推輓による」という（武部敏夫氏「統史愚抄」、『国史大系書目解題』上巻、一八四頁）。

しかるに、安永七年（一七七八）五月、紀光は假を申さず密かに近江の長命寺へ詣したことで、光格天皇の勅勘を蒙る。まもなく勅免さ

窓
れたが、それを機に自ら官途をたち、「紀伝之職」にあった亡父光綱
の遺志を継承して、国史の編纂に力を尽くす。それから晩年まで二
十余年かけて『統史愚抄』四十八巻を完成させたのである。本書には
上 一七九頁）が貫かれており、信頼度の高い歴史書とみなされてい
る。

凡例
一、年譜の関係事項の中※は後桜町女帝の直接関係事項ではないが重要事項。

一、年号のカッコ内の数字の上は西暦、下は後桜町女帝の年令を示す。

一、後桜町上皇時代から崩御までの年譜については「後桜町上皇年譜稿」として『岐阜聖徳学園大学紀要』〈外国語学部編〉第四十集
(平成十三年三月刊)に掲載。

年号 西暦 年令	関 係 事 項	補 注
元文五 (一七四〇・一)	8・3 桜町天皇 ^A の第二皇女として、母准后舎子 ^B (二条故関白吉忠女)の里殿(中筋にあり)に誕生、「以茶宮」と号す。	A 御父の桜町天皇はこの時二十歳。中御門天皇の第一皇子で、御母は前摂政藤原家照の女尚子。 B 御母の舎子はこのとき二十一歳。母は菅原利子(綱紀の女)。
寛保元 (一七四一・二)	9・13 母后と共に土御門内裏に入る。 正・17 御垂髪(御髪眞なり)。 ※2・9 桜町天皇の第一皇子誕生、「八穂宮」(桃園天皇である)と号す。12・9 桜町天皇第一皇女盛子内親王(母舎子、5歳、「美喜宮」)御髪剪。	
寛保二 (一七四二・三)	12・26 御色直。	
延享元 (一七四四・五)	11・25 御着裳、髪剪あり。	
延享二 (一七四五・六)	※10・5 「八穂宮」(母典侍藤原定子)、舎子を母儀とし、その曹司(禁裏北殿)に渡り、二条家を以って外戚とす。12・8 「八穂宮」(5歳)を「茶地宮」と改称。御髪剪、御着袴を舎子の曹司において行う。	
延享三 (一七四六・七)	8・4 「以茶宮」を改め「緋宮」と称す。 ※6・25 同母姉二品盛子内親王(10歳)薨す。	

(延享四 一七四七・八)	12・24 疱瘡治る。先日来、疱瘡流布す。 ※2・28 下御所(後院、正親町院以降、凡代々の仙洞の地)を今より桜町殿と称す。3・15 儲皇假仁親王(7歳)、小御所において元服の儀あり。3・16 遐仁親王を皇太子となす。4・16 今日より三カ日、安鎮小法を桜町殿(脱屣後仙洞)で行う。4・19 今日より三カ日、安鎮小法を桜町殿北殿(讓位後中宮御所)で行う。5・2 天皇(28歳)、皇太子(7歳)に讓位し、桜町殿へ行幸。次いで准后舎子も同北殿へ移らる。同日、土御門里内で受禪。5・27 舎子(32歳)を皇太后(大宮と称す)とす。
(寛延元 一七四八・九)	5・28 御紐直。
(寛延二 一七四九・一〇)	9・1 緋宮の御名字智子と治定す(親王宣下已前なり)。
(寛延三 一七五〇・一一)	※2・22 桜町殿(院御所)において、水無瀬宮御影供和歌会あり(題は「花添 _ニ 春色 _ニ 」)。3・18 院において、柿本神影供和歌御会あり(題は「山花似 _レ 雲」)。 3・28 内親王宣下あり。上卿は新大納言雅香、勅別当は日野中納言光胤奉行は藏人頭左大弁俊逸朝臣。 ※4・23 上皇、今晝已来、御惱増氣(脚氣)、辰刻、桜町殿にて崩御(31歳)。4・29 桜町院と追号す。5・18 泉涌寺に葬る。 6・26 舎子、青綺門院と院号す。落飾(雜髮)。
(宝暦元 一七五二・一三)	6・12 和歌御会始。題は「緑松臨池」(飛鳥井大納言雅香が出す)このとき、御歌一首がある。 ⁽¹⁾
(宝暦二 一七五二・一三)	11・27 御齒黒。
(宝暦三 一七五三・一四)	8・29 泉涌寺に詣で給う(密儀)。

(1) きみが代の千とせかさねてみどりなる
かげをみ池にうつす松がえ
この御歌は、『宸翰英華』第二冊、四八五頁、一四八「宸翰御懷紙」一枚(東山御文庫御物)とされるものであり、この「和歌御会始」で詠まれた一首が後桜町天皇の初出歌とみてよいのではないかと思われる。すでに十二歳でこのようなお歌を詠んでおられたのである。

宝曆五
(一七五五・16)

宝曆六
(一七五六・17)

宝曆八
(一七五八・19)

宝曆九
(一七五九・20)

宝曆十
(一七六〇・21)

宝曆十二
(一七六二・23)

※11・4 中務卿職仁親王、和歌天仁遠波口伝を日野大納言光綱卿に授く(勅許による)。同17 大歌所を再興す(去る10・25西園寺大納言公晃を別当に補す)。

※11・26 従三位藤原富子(前関白兼香女)入内。同27 女御宣下あり(口宣)。

※4・23 桜町院七回聖忌の御仏事が般舟三昧院と泉涌寺で行われる。5・13 後院(桜町院) 鎮守社正遷宮。9・16 天皇(16歳)、和歌天仁遠波の御伝受あり、職仁親王が授け奉る。

※3・7 天皇(18歳) 御拭黛。7・2 第一皇子、母女御富子の中筋里殿において降誕、「若宮」(後桃園天皇である)と号す。

※正・18 「若宮」を以って儲皇と称す。

2・28 無品智子内親王に一品宣下あり(口宣、直叙)。上卿は三条大納言季晴、奉行は藏人頭右大弁留房朝臣。

※3・21 女御従三位富子(17歳)に准三宮の宣下あり。5・15 儲皇(2歳) 御名英仁親王宣下あり。

12・21 女院(青綺門院) 御所より、桜町殿新第(女院御所同郭、南方に在り)に移る。

※7・12 天皇脚氣御悩あり。

7・20 天皇御悩であり、もし「御事」があらば、儲皇親王が未だ五歳で踐祚をどうこうすることが出来ない。そこで幼稚の間、今上の姉である智子内親王に暫く踐祚あって、親王が十歳頃に讓位あるべき旨、勅定あった由、関白近衛内前が沙汰せられた。同日、智子内親王は桜町殿より御入内(密儀)。

※7・21 今晚寅刻、天皇(22歳) 常御所に崩御。⁽²⁾

(2) 崩御されたのは「琴書画絵問」であった。実は去る十二日未刻に崩せられたが「依御継体事往返于関東、因及今日」んだという。

(3) 「聖廟内々御法楽」というが、不明。柳原紀光の『続史愚抄』にも、この日の記事はない。もちろん『列聖全集』『後桜町天皇御製』『皇室文学大系』第三輯所収、以下『列聖』と略称す)の方も、宝曆十四年(一七六四) からしか収められていない。しかし、『宸翰英華』(第二冊)一一五四「宸筆御短冊」一枚(東山御文庫御藏)に次のごとくみえる。

社頭松
千世かけてあふぐ北野、一夜まつ
めぐみあまねく猶もさかへむ

(4) この日、読師をつとめたのは、権大納言兼胤、講師は藏人頭左中弁隆望、講頌は権中納言雅重(発声)であった。藏人左少弁光房も詠進している。この光房がのちに改名し、柳原紀光となる(『続史愚抄』の作者)。「列聖」にこの日の御製が収められている。

(4) この日、読師をつとめたのは、権大納言兼胤、講師は藏人頭左中弁隆望、講頌は権中納言雅重(発声)であった。藏人左少弁光房も詠進している。この光房がのちに改名し、柳原紀光となる(『続史愚抄』の作者)。「列聖」にこの日の御製が収められている。

宝曆十三
(一七六三・24)

7・21 来る二十七日、智子内親王踐祚の事、治定す。なお、昨日より入

内されているので「渡御の儀」には及ばない。7・27 土御門殿
において踐祚の儀あり。前左大臣近衛内前の関白を改めて摂政と
為す。7・29 御諱の訓を改めて登志子と為す。(元、佐登子)

※同日、先帝追号を「桃園院」とす。

※2・10 先帝実母藤原定子に門号宣下あり、開明門院と号す。落
飾(薙髪)。11・10 儲皇親王(6歳)禁裏三間(日米、准后富
子の曹司に坐す)において御髪剪、御着袴等あり(密儀)。

8・25 聖廟内々御法楽。(6)

11・18 摂政(内前)直廬において、即位の礼服御覧あり。11・27 紫宸

殿において即位礼、行われる。

明和元
(一七六四・25)

正・24 代始和歌御会始。(4) 垂簾出御。題は「松色春久」(飛鳥井前大納言

雅香、出す)。御製読師は、摂政内前である。正・26 和歌当座
御会あり。当年初度、垂簾出御。8・10 御学問所において蹴鞠
御覧あり、垂簾恒の如し。8・15 小御所において詩歌当座御会
あり。垂簾出御。

明和二
(一七六五・26)

正・24 和歌御会始。題は「初春祝道」(民部卿為村出す)。

8・16 内裡和歌御会。(5) 題は「十六夜月」。9・4 和歌天仁遠波御伝受

あり。中務卿職仁親王が、これを授け奉る。(6) 9・9 和歌御会。
題は「重陽宴」。9・28 和歌当座御会(御伝受の後なり)。題は
「玉津嶋月」、「和歌浦松」(二首、懐紙なり。民部卿為村これを
出す)。

11・3 内侍所御法楽和歌当座御会あり。(7) 11・7 今日より三カ夜、内侍

所御神楽行われる(勅願、和歌御伝受の故か)。天皇御さす。

いく春もなほ色そへよすべらぎの
世世のさかえを契る松が枝

(5) この和歌御会は、『統史愚抄』にはみえない。

『列聖』には、「十六夜月」の題でみえる。
さやけさは昨日の影に変わらずも
待ち出でてむかふ十六夜の月

(6) この時、職仁親王に賜わったのが次の御製である。
しきしまのみちのめぐみにわれもいま
もれぬをあふぐ時はこのとき

これは、『宸翰英華』第二冊四八五〇六頁に収めら
れている高松宮御蔵の一一四九の「宸筆御懷紙」で
ある。

さらに同じく「その時の御当座の御製である」
(四八六頁)一一五一の「宸筆御懷紙(同宮御蔵)
には二首の御製がみえる。
めぐみしる道のひかりも玉つしま
くもらぬ月のあきかへむいやまし

いまよりはなをぞさかへむいやましに
枝しげくなる和歌のうらまつ

(7) これについて、『統史愚抄』(明和二年十一月三
日条)では「依和歌御伝受事一歌」と注記し、さら
に「組題百首。民部卿為村出之、於小御所也。」
とつけ加えている。この日の読師は飛鳥井前大納言
雅香、講師は蔵人右中弁光房である。

(8) 『列聖』の方にはみえないが翌年も同日に行われ
ており、この日も御製があったと思われる。

(9) この日の読師は権大納言兼胤、講師は蔵人頭右中
将公明朝臣、講頌は庭田前大納言重照(発声)、御
製読師は左大臣尚実で、同講師は日野中納言資枝、
奉行は権中納言雅重、蔵人右中弁光房も詠進してい
る。『列聖』に次のようにみえる。

このはるの言葉の花のさかえをも
色に見せたるその梅が枝

(10) 『列聖』に次の御製がみえる。

のどけしなこすゑの雪もうちとけて
かすむ園生の春のはつ風

(11) この御会は、宝暦十年の例により小御所において

(明和 三
一七六六・二七)

※11・29 儲皇親王家々司職事已下が補せらる。

正・24 和歌御会始。題は「禁苑春來早」。正・26 和歌当座御会(当年初度)。2・4 勅題「寄松祝」の和歌を人々に召す。

※2・17 儒門上達部殿上人等小御所において講書す。

2・22 水無瀬宮和歌御法楽あり(記録所においてなり)。

※泉殿新造成る。御小座敷の東にあり、今の「御納涼所」なり。

5・14 儲皇親王(9歳)小御所において御読書始あり(密儀)。

撰政内前、前関白道香(親王外祖父)など着座。新清三位宣条が古文孝経を授け奉る(これにより従二位となる)。

5・16 三部抄伝受あり。職仁親王授け奉る。

※5・27 儲皇親王、御紐直。

6・13 小御所において和歌当座御会、出御(垂簾恒の如し)。7・7

和歌御会。題は「二星期秋」。9・9 和歌御会。題は「秋菊有佳色」。

(明和 四
一七六七・二八)

正・24 和歌御会始。題は「梅有佳色」(権中納言雅重出す)。去年、和歌御伝受があり、今年は御灌頂があるので厳重。御製読師は左大臣尚実である。正・26 和歌当座御会あり(今年初度)。講師

は藏人権右中弁光祖、奉行別当は益房。2・2 春日祭。当社御法楽和歌当座御会あり。(1)

2・3 儒門公卿前菅大納言綱忠已下三人、殿上人内記為璞朝臣已下六人講書。御簾の中で聞食す、恒の如し。2・9 内侍所前庭において「五常楽千反」あり。楽所輩奉仕す。これも、歌道御灌頂の「無為御祈」かとされる。2・

14 古今集御伝受あり。職仁親王がこれを授け奉る。2・24 古今集御伝受竟宴和歌御会あり。題は「寄道祝言」(民部卿為村が

行なわれた。講師は藏人右中弁光房で奉行は庭田前大納言重熙である。「列聖」に御製五首が収められている。

(12) この日の竟宴和歌御会は、歌仙公卿撰政内前已下廿一人、殿上人藏人頭左中弁伊光朝臣已下九人、藏人右中弁光房、そして式部卿家仁親王已下四人等が参仕した。中務卿職仁親王は病により不参。しかし、和歌は献ぜられたという。小御所において披講があった(披講和歌は「御製俱井六首」であった)。垂簾出御である。読師は右大臣輔平、下読師は左衛門督隆望、講師は藏人頭左中弁伊光朝臣、講頌は按察使有美(発声)、同公卿民部卿為村已下六人である。御製の読師は撰政内前、同じく講師は別当益房、奉行は万里小路前大納言政房である。このときの御製が「列聖」に「竟宴御会」としてみえる。

絶えせしなむべすなほなる教をも
代代につたふる言の葉の道

(13) 『宸翰英華』一一五〇「宸筆御懐紙」(一幅)へ高松宮御所蔵の次の御製である。
われもまた恵をあふぐすゑとをき
こと葉のみちのおやとたのみて

(14) 『宸翰英華』一一五五「宸筆御短冊」(五枚)へ大阪市住吉神社蔵「および同一一五六「宸筆御短冊」(五枚)へ和歌山市玉津島神社蔵」と「列聖」に十首入っている。

(15) 柿本神影は信実朝臣の画で、延享二年鳥丸故前内大臣光栄が求め献じたものという。宝曆十一、十二年は、記録所をもって供所とした。読師は葉室前大納言頼要、講師は藏人頭左中弁伊光朝臣、講頌権中納言雅重(発声)、奉行は庭田前大納言重熙、藏人右中弁光房詠進。「列聖」に次の御製がみえる。
すゑとほく神もさこそは守るらめ
たむけて仰ぐやまと言の葉

(16) 『宸翰英華』一一五七「宸筆御短冊」(五枚)へ島根県柿本社蔵の御製五首で、「列聖」にも題と共に入っている。古今伝受の御報賽である。

(17) 『宸翰英華』一一五八「宸筆御短冊」(五枚)へ北野神社蔵の御製五首で、「列聖」にも題と共に入

明和五
(一七六八・29)

- 出す)。3・14 先月の竟宴に際して御製一首 有栖川宮職仁親王に賜わっている。さらに同日、住吉社および玉津島社にその報賽のために納められた御製各々五首がある。同・18 小御所において柿本神影供あり。題は「寄レ神祝」(権中納言雅重出す)。5・18 石見国(島根県)および播磨国(兵庫県)の柿本社に御法楽の御製各五首が納められた。これも古今伝受の御報賽である。
- 6・19 聖廟御法楽あり。古今伝受の御報賽であらう、五首の御製がある。7・7 和歌御会。題は「懐三牛女」。9・9 和歌御会。題は「対レ菊契レ秋」(民部卿為村出す)。9・16 水無瀬宮御法楽に御製三首あり。
- ⑨・22 儲君英仁親王の御読書、孝経、終了のことに、女院(開明門院)を始め諸所より祝儀の品々が届けられ、お祝いの儀が行われたと宸記にみえる。
- ※11・24 摂政内前の息師久が元服。この「師久」という名字は宸翰を以って賜わった。
- 12・2 英仁親王の御読書として大学をはじめられたこと宸記にみえる。
- 正・24 和歌御会始。題は「松竹春増レ色」(民部卿為村出す)。正・26 和歌御会あり(当年初度)。
- ※2・19 儲皇無品英仁親王(11歳)を皇太子に册立。節会。恒の如く垂簾出御。
- 2・22 水無瀬宮和歌御法楽あり(短冊。記録所においてなり)。
- ※3・15 春宮御元服、来八月と治定す。
- 3・18 柿本神影供和歌御会あり(小御所において)。題は「吉野山桜」(右兵衛督為泰出す)。

つてゐる。これも古今伝受の御報賽であらう。

(18) 題は、奉行等右兵衛督為泰、藏人右中弁紀光(元光房、六月四日改名)詠進。「列聖」に「憶牛女七夕御会」として御製一首あり。

(19) 奉行は万里小路前大納言政房。藏人右中弁紀光も詠進。「列聖」にも「重陽御会」として御製一首がみえる。

(20) 『宸翰英華』一一五九「宸筆御短冊」(三枚)へ大阪府水無瀬神宮蔵「および『列聖』に御製三首みえる。これも「蓋し古今伝受の御報賽であらう。」(同書四九二頁)と解説されているように先の諸社と同じである。

(21) 『宸翰英華』一一四六「宸筆御記」(四十一冊)へ京都御所東山御文庫御物、明和四年閏九月廿二日条に、「しん王とく書孝経上ル。御まなまいる。あなたよりもまいる。かけご松もやうぶんこ、末広入進上、女院さまより香箱香上ル。撰政より紅葉枝、巻物^{和歌}、参る。撰政、両てん、葉むろ、ふし原、^(籠奏)当番ぎせう。三卿小ざしきにて九もじ也。にぎくも也。」とある。

(22) 『宸翰英華』一一四六「宸筆御記」十二月二日条に「しん王御とく書大がく、はじめられ候事申。何時にてもと申さる。」とあり、解説にも「儲君御学問の事に深き敬慮を注がせ給ふ御様子が窺はれる。」(四八三頁)とある。

(23) 読師は油小路大納言隆前、講師は藏人頭左中弁伊光朝臣、講頌庭田前大納言重熙(発声)。右衛門督益房、藏人右中弁紀光詠進す。「列聖」に御製あり。すなわち「わが園の春にあひおひの松竹はおなじ千年のいろを添ふらし」で、さらにこれにつづけて「神祇」と題して次の御製がある。「まもれなほ伊勢の内外の宮ばしら天つ日つぎの末ながき世を」である。この正月十三日に、来月十九日儲皇親王の立坊のことが定められた。これにちなんで詠まれたものである。

(24) 講師は左少将為章朝臣、奉行は庭田前大納言重熙。藏人右中弁紀光は参仕し詠進す。「列聖」に

明和六
(一七六九・三〇)

3・20

百首宸詠和歌(二管各台に載す)を伊勢両宮に奉納せらる。4・24 「海辺松」という題の御製一首あり。5・24 「橋薫風」、「鶴河」という題の御製二首あり。7・7 和歌御会。題は「七夕手向」(左少将為章朝臣出す)。8・9 已刻、東宮(11歳)南殿(土御門里内)において御元服の儀あり。主上御同座。9・9 和歌御会。題は「寄」菊祝」。11・9 七社奉幣が行われた。すなわち、当代何のさわりもなく、英仁親王が立派にご成長になり立坊・御元服も無事にすまされたことへのお礼と朝廷ご繁昌、歌道繁榮、天下太平を願うことである。

正・24

和歌御会始。題は「鶯有」歡声」。左少将為章出す。2・22 水無瀬宮和歌御法染あり(記録所において)。

3・18

小御所において柿本神影供和歌御会あり。題は「寄花神祇」(右兵衛督為泰出す)。3・24 和歌御会あり。題は「寄」鶴祝」(新大納言雅重出す)。4・24 この日、「述懐」と題された御製「おろかなる心ながらに国民のなほやすかれとおもふあけくれ」なる一首が詠まれた。5・1 東宮ご成長(十二歳)により、来年冬にはご讓位あるべき旨が定まる。これ「東風」吹き来る間、にわかには仰せられたという。7・7 和歌御会。題は「七夕迎」夜」(民部卿為村出す)。9・3 今夜亥刻、伊勢の内宮ご遷宮によりこの時刻、石灰壇代に御して、ご祈念される。9・6 夜亥刻、外宮のご遷宮により内宮と同じく祈念される。

※9・8 青綺門院(女院御所、桜町殿の北殿)の御庫が火事となる(盗賊のしわざで火薬で切り破られたという)。桜町院の宸翰や重宝が納められている。

(1) 「立春」と題された御製が一首ある。

(2) 講師は藏人右中弁紀光、奉行は油小路大納言隆前であった。「列聖」に「てらす月かげ」と題された御製一首がある。

(3) 講師は源大納言輔忠、講師左少将為章朝臣、講師庭田前大納言重熙(発声)。奉行は権中納言雅重、藏人右中弁紀光詠進す。「列聖」に御製一首あり。

(4) この三首は、宮内庁三の丸尚蔵館で、平成十一年六月五日〜七月二十五日まで行なわれた特別展「宸翰と日本文化の伝統」の図録にみえる「48後桜町天皇 和歌懐紙(三首) 一幅(書陵部)」の解説では、明和七年頃のものでないかと推定されている。しかし、「列聖」の明和五年のところに入っているのここに掲げた。なお(1)の一首は四月二十四日、(2)の二首は五月二十四日となっている。

(5) 奉行は権中納言雅重。藏人右中弁紀光詠進す。「列聖」に「七夕御会」として御製一首あり。

(6) 題者奉行等右兵衛督為泰、藏人右中弁紀光詠進。「列聖」に「重陽御会」として次の御製一首あり。「植多おきしわが九重の菊に今朝おきそつゆは千代の数かも」。

(7) 『宸翰英華』一一四六「宸筆御記」明和五年十一月九日条に「伊勢/石清水/賀茂上/松尾/平野/いなり/春日/今度七社奉へい(密)の事、当代何のさほりなく、当春立坊、当秋元服する〜とすみ候に付て也。なほ〜長久、朝ていはんじやう、歌道はん榮、天下太平心願共也。東宮するすると成長、御長久御はんじやう願共也」とある。

(8) 講師は春宮大夫賞季、講師は藏人頭左中弁紀光、講師は鷲尾前大納言隆熙(発声)。奉行は右兵衛督為泰。「列聖」に次の御製一首がある。すなわち、「幾千代の春をちぎりて聞きはやす初音うれしき宮の立坊および御元服のことを意識して詠まれたことがわかる。

(9) 講師は藏人権右少弁経逸。「列聖」に、「春夕月」の題で御製一首あり。

(10) 講師は油小路大納言隆前、講師は藏人頭左中弁紀

明和七
(一七七〇・三)

9・9 和歌御会。題は「毎秋愛_レ菊」。10・8 ご讓位は来年十一月、御即位は来々年夏と定まる。10・21 此日、俄かに和歌にてをはの口伝を兵部卿織仁親王(十六歳)に伝え賜う。これは父親王(織仁)病い急のためという。10・22 一品中務卿織仁親王(靈元院皇子、桃園院や当代などの和歌御師範)薨す(五十七歳)。よつて今日より三日間、廢朝。

正・24 和歌御会始。題は「迎_レ春祝_レ代」(飛鳥井大納言雅重出す)。正・26 和歌当座御会あり(今年初度)。2・25 北野宮和歌御法楽あり(常の如く記録所において)。3・18 小御所において、柿本神影供和歌御会あり。題は「花色似_レ雲」(左少将為章朝臣出す)。3・26 主上より摂政内前に伊勢物語口伝を授け賜う。3・28 御讓位後の仙洞となる桜町院旧地「桜町殿」の本作始あり。

※東宮御即位、来年四月に定まる。

7・7 和歌御会。題は「七夕草」(左少将為章朝臣出す)。9・9 和歌御会。勅題(当代初度)は「禁庭菊」。9・28 桜町殿棟上げ。

10・13 御讓位は、来月廿四日と密かに定む。10・15 摂政内前、藏人頭左大弁紀光を以って太政大臣を罷めたいと請う。去年も去々年も申請があったが許されず。今回も重ねて叡慮あるべき旨が仰せられた。このような辞意に対して天皇より内前に賜わった御製がある。11・24 天皇、土御門里内において皇太子英仁親王に讓位。新主御同坐たるにより、劔璽渡御の儀はなし。この後、旧主(後桜町女帝)は廊を経て北殿(暫く仮仙居とす)に渡御す。

※11・24 土御門里内にて受禪(天皇13歳)。前太政大臣内前、元の如く摂政となる。

光、講頌は按察使有美(発声)。奉行は右兵衛督為泰。『列聖』に「この神のたむけにつきぬ言の葉のはなも千年の春をかさねむ」の御製がある。

(35) この日、春宮御詠を献せらるると云う。但し、披講および奉行はない。密儀であったのかもしれないという。近頃、群鶴が内裏の上を舞う故であるうという。『列聖』には、同日であるが題が異り、御製三首がみえる。

(36) 奉行は権中納言益房。藏人頭左中弁紀光も詠進す。『列聖』に御製一首がある。なお、このとき、春宮(後桃園天皇)の御歌もある。

(37) 題者奉仕等は飛鳥井大納言雅重。藏人頭左大弁紀光詠進す。『列聖』に御製一首あり。

(38) 読師は飛鳥井大納言雅重(奉行を兼ねる)。講師は左少将為章朝臣。講頌は鸞尾前大納言隆熙(発声)。藏人頭左大弁紀光詠進す。『列聖』に次の御製がみえる。すなわち、「諸人もひとつところに祝ふ代のゆたけさ見えて春ぞたのしき」であるが、これは今年十一月のご讓位もきまっていたの歌である。

(39) 講師は藏人左中弁光祖。奉行は民部卿隆前。藏人頭左大弁紀光参仕し、詠進す。『列聖』に「立春風」として次の一首がある。「やはらぐる春たつ今日に吹く風は民の草葉にまぶおよぶらし」であるが、ここに天皇として常に民のことを考えておられることがわかる(明和六、四、二十四の御製「述懐」なども同趣)。後年、後桜町上皇からの御教訓の御消息に対する光格天皇の御返書には「仰之通何自身を後にし、天下万民を先とし……」(『宸翰英華』第二冊、一三三七「宸筆御消息」一通(京都御所東山御文庫御物)という上皇のお教えが生きているのである)。

(40) 講師は藏人頭左大弁紀光。奉行は民部卿隆前。『列聖』に「聖廟御法楽」として御製あり。

(41) 読師は春宮大夫賞季。講師藏人頭左大弁紀光。講頌は按察使有美(発声)。奉行は民部卿隆前。『列聖』に御製あり。

(42) 奉行は民部卿隆前。藏人頭左大弁紀光詠進す。『列聖』に題「七夕草花」として御製一首あり。

明和
(七七)・八
32

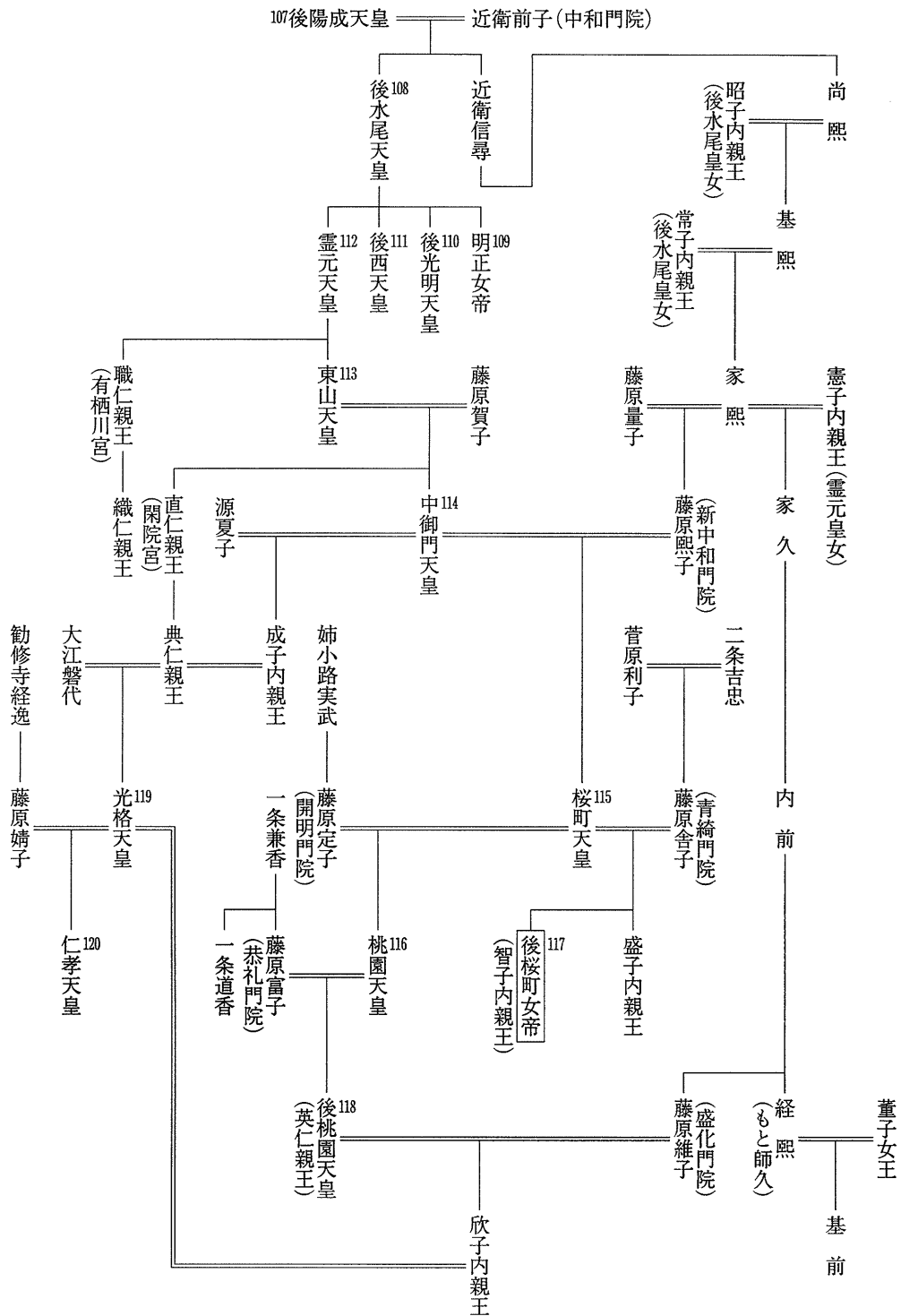
11・24 旧主御所において院司を補す。右大臣輔平を執事となす。

正・18 三十六歌仙絵を院の御所となる桜町殿鎮守拜殿に掲げられる。しばらくして桜町殿造りおわる。正・25 院(後桜町上皇) 禁裏北殿より移徙して桜町新仙洞に幸す。

(43) 奉行は庭田前大納言重熙。『列聖』に御製あり。

(44) 『宸翰英華』(第二冊)一一七〇「宸筆御詠草」
 〈陽明文庫蔵〉の次の一首である。「をろかなるわれをたすけのまつりごとなをもかはらずたのむとをしれ」。以前より辞意をあらわしていたので、どの時の御製かは判明しないが、ここで掲げておく。

〈平成十二年八月三十日稿〉



※本系図は太田亮博士『姓氏家系大辞典』巻頭「皇室御系図」などにより作成。